



# オリンピックに見る 女性とスポーツの歴史

東京オリンピックは過去最多の女性選手が参加し、男女混合種目の採用が拡大されるなどジェンダーバランスに配慮された大会でした。近代社会でスポーツはジェンダー秩序化されてきたといわれており、オリンピックの歴史は単なるスポーツの歴史ではなく女性の権利獲得の歴史でもあります。オリンピックの年譜と共に、女性とスポーツの歴史を振り返ってみましょう。

## 女性が全競技に参加できたのは21世紀に入ってから！



東京オリンピックの女性選手数は過去最多で、国際オリンピック委員会（IOC）によると、過去最高に「ジェンダーバランスの取れた」大会だったそうです。

今回、女性選手の比率が48.8%で男女比はほぼ半々になりましたが、ジェンダーバランスが取れるまでに初回大会から125年もかかりました。オリンピックでは参加選手の約40.5%が女性で、2016年のリオ大会よりも100人ほど増えています。



### オリンピックと女性スポーツの歴史

1896	近代オリンピック 第1回大会(アテネ)	男性のみ参加	女性選手 0%	女性スポーツの誕生は19世紀末 初回オリンピックは古代オリンピック同様女子禁制でした
1900	第2回大会(パリ)	女性が初参加	女性選手 2.2%	参加種目は男性のみの会議で決定 男性の運営委員が「女性らしい」と認めたテニスとゴルフのみへの参加でした
1928	第9回大会(アムステルダム)	陸上の人見絹江選手が日本人女性として初参加し銀メダルを獲得	女性選手 9.6%	日本の女性スポーツは1920年ごろから 高等学校で水泳などが行われるようになりました。学校授業で体育が男女共修になったのは1989年の指導要領改訂からです
1991	五輪憲章に「あらゆる形態の差別は相いれない」が追加			差別の解消に関する根本原則の顕著な変化 五輪憲章に性別、出自などあらゆる差別を容認しないことを追加しました。これ以降、プライトン宣言などを経てオリンピックの性に関わる平等が拡大されていきます
1994	「プライトン宣言」の採択	スポーツのあらゆる分野におけるジェンダー平等実現を図る10の原則		オリンピックのビジョンの1つである「多様性の調和」の実現に向けた取組が進められてきたのです。女性選手の参加割合が20%を超えるのにも1976年の第21回大会までかかったみたい…。2014年のアジェンダ2020で参加比率を50:50にする達成目標を掲げ、女性の参加種目の拡大などに取り組んでいるオリンピックをきっかけに、社会の多様性や調和の必要性について皆で考えていきたいですね。
2012	第30回大会(ロンドン)	全競技に女性の参加が認められる	女性選手 44.2%	
2014	五輪憲章に「性的指向による差別を認めない」が追加			
2021	第32回大会 (東京オリンピック2020)	男女混合種目を新たに7競技採用(全10競技)	女性選手 48.8%	五輪史上最もジェンダーバランスの取れた大会といわれています。女性の参加率も過去最多で、トランスジェンダーの選手の参加も認められました

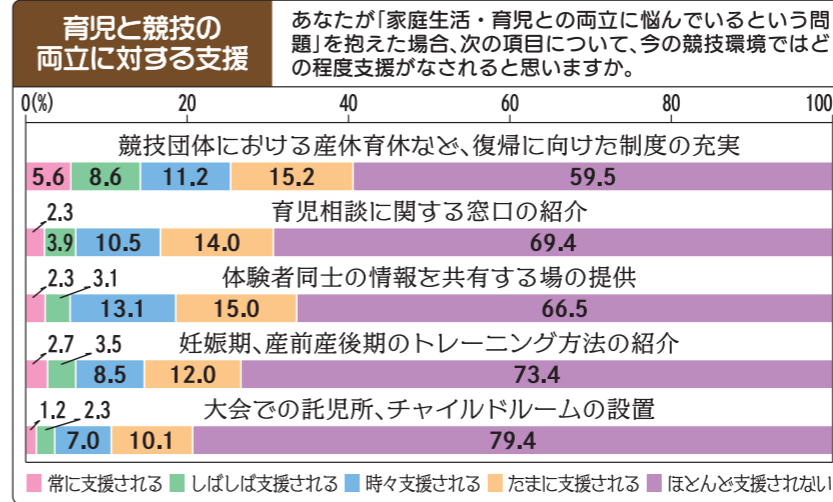
## スポーツと 男女共同参画

性別にかかわらずスポーツをする機会が平等であるべきなのはもちろんですが、この「平等」は男女が「選手」というくくりで同じように扱われることを指すではありません。女性選手のリプロダクティブ・ヘルス/ライツを守ることは次の世代の育成にもつながる重要な問題です。

### 女性選手が直面する課題

#### 出産・育児と競技生活との両立

女性選手は、妊娠等を機に現役を引退するケースが多く、独立行政法人日本スポーツ振興センターが、女性選手に行った出産・育児と競技の両立支援に関するアンケートでも「ほとんど支援されない」という回答が7~8割を占めています。



#### 女性選手の三主徴

女性選手の健康管理等における問題として、「三主徴」（摂食障害の有無によらないエネルギー不足・無月経・骨粗しょう症）が指摘されており、放置すると疲労骨折などにより競技生活の継続が難しくなる場合があります。

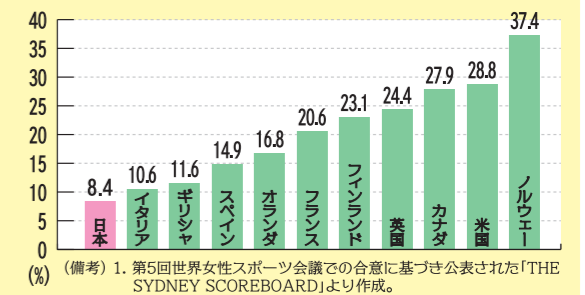
#### 女性選手の性的画像被害

隠し撮りなどされた女性選手の画像や動画に性的なイメージの処理を施してインターネットに投稿・拡散したりする「性的画像問題」が広がっており、日本オリンピック委員会が対策に乗り出すことを表明したほか、相談窓口の設置などが急がれています。

### 女性指導者やスポーツ団体における女性役員の育成

スポーツ庁の「女性スポーツ活躍促進策」(平成30年)によると、日本のスポーツ指導者に占める女性の割合は27.5%と低く、スポーツ団体における女性役員の割合も国際的に低い水準にあります。女性指導者の育成は女性選手が体の変化や不調について相談しやすい環境を整えるとともに、女性選手のセカンドキャリアの場を整備するという意味でも取組が急がれています。

#### スポーツ団体における女性役員の割合(国際比較)



※グラフは「男女共同参画白書(概要版)平成30年版」を基に作成

### 男女共同参画の実現に向けて



スポーツ選手が競技生活の中で感じている問題は、自分たちの身近な問題にも重なる部分が多そうです。オリンピックをきっかけに、スポーツや社会のあり方についても考えてみたいですね。

スポーツは人生をより充実させるためのもの。勝利至上主義のために健全な発達や個人の尊厳などを軽視することにならないよう、一人ひとりが意識していきたいですね。



**用語解説**  
リプロダクティブ・ヘルス/ライツ  
「性と生殖に関する健康と権利」

リプロダクティブ・ヘルスは、個人、特に女性の健康の自己決定権を保障する考え方。健康とは、身体的、精神的及び社会的に良好な状態にあることを意味する。リプロダクティブ・ライツは、それをすべての人々の基本的人権として位置付ける理念。リプロ

ダクティブ・ヘルス/ライツの中心課題には、子どもを産むか産まないか、いつ何人子どもを産むかを選ぶ自由、安全な妊娠・出産、子どもが健康に生まれ育つことなどが含まれている。